

故渥美和彦先生を偲んで

阿部 裕輔

日本医療科学大学保健医療学部医療・基礎教育科教授

渥美和彦先生は、学会を作るのが好きでした。日本レーザ医学会、日本生体磁気学会、日本サーモロジー学会、日本統合医療学会などなど、研究会も含めると随分たくさん創設されていると思います。人工心臓と補助循環懇話会も渥美先生が創設されました。学会を作るのをライフワークとしていたのかもしれませんが、私が渥美先生の下で助手として働いていたのは1年半くらいでしたが、ちょうどそのときは日本生体磁気学会を立ち上げているときでした。私は、学会を作ることにはまったく興味がありませんでしたし、事務局の雑用が結構大変でしたが、渥美先生が喜んでる姿を見て、お手伝いさせて頂けることが嬉しかったです。偉大な先生は新しい学会を創設されていらっしゃる事が多いように思いますが、渥美先生ほど数多くの学会を創設された先生はあまりいらっしゃらないのではないかと思います。専門の研究は専門の学会がないと進歩しません。渥美先生は、「僕らの頃はいばらの道だったのだよ」とよくおっしゃっていましたが、いばらの道は学会を作る道だったのかもしれませんが。

渥美先生は、買い物が好きでした。渥美先生のお宅には、外国のお土産が山のようにあり、海外の学会に行くと、色々なものをお買いになります。ロサンゼルスで学会があったときに、私も渥美先生と一緒に参加したのですが、私が空港からレンタカーで会場のホテルにやって来たのを察知して、懇親会で「阿部君、明日買い物に付き合ってくれないか」と言われました。渥美先生は基本的に学会が好きで、最前列で発表をお聞きになり、必ず質問をします。しかし、学会2日目はめばしい演題もなく私の発表も終わっていたので、私は西海岸をドライブしようと思っていたのですが、折角の渥美先生のお誘いですので、「喜んでお付き合いします」とお返事しました。ドライブの行き先は、アンティー

クショップでした。渥美先生は、中華風の絵が象嵌で描いてある美しい黒漆塗りの大きな屏風が気に入ったらしく、商談を始めました。それは、どう見てもテレビ番組の『開運!なんでも鑑定団』級で、さらにこんなに大きなものをどうやって日本に持って帰るのだろうかと疑問でした。渥美先生が、アメリカン・エクスプレスのプラチナカードをパシッと出したら、全てが静かに終了しました。結局、次の日も渥美先生の買い物に付き合いました。

渥美先生は、カレーが好きでした。完全人工心臓の動物実験はヤギを用いて行っておりました。完全人工心臓の手術は朝から始めて夜に終わるので、実験のときには、動物飼育のおばさんが大きな鍋でカレーを作ってくれるのが習慣でした。といっても、渥美研究室では1週間に1、2回、完全人工心臓の動物実験がありましたので、しょっちゅうカレーでした。渥美先生は自分の分を小さな鍋に取り分けて保存し、長いときには1週間もカレーを食べていました。渥美先生の退官とともに、カレーは終了になりました。時は流れ、「東京大学医学部附属医用電子研究施設」から「東京大学大学院医学系研究科医用生体工学講座」へと研究室の名前が変わり、その後、私が教室主任となったときに、「完全人工心臓の動物実験カレー」を復活させました。秘書が、渥美研究室当時の大鍋で、一生懸命作ってくれました。人工心臓の研究が行える研究室はあまりなかったので、様々な大学の学生が私の研究室に来ました。私の研究室で研究を行い、大学や大学院を卒業して行った学生達は、「カレーを食べると完全人工心臓の動物実験を思い出す」と言います。

渥美先生は、偉大な世界のリーダーとして活躍されました。私は渥美先生の最後の弟子でした。ここにご冥福をお祈り致します。